

映画の感情教育

—— 映画文学人生論

原作：安岡章太郎 (1975) 「読売新聞社」
参考： 外人部隊 (1933) 監督：ジャック・フェデー
 巴里の屋根の下 (1930) 監督：ルネ・クレール
 巴里祭 (1933) 監督：ルネ・クレール
 女だけの都 (1935) 監督：ジャック・フェデー
 望郷 (1937) 監督：デュヴィヴィエ

映画館は不良の巣か

映画で感動した記憶で、一番印象に残っているのは昭和十二年二月十一日、神田の南名座で『外人部隊』をみたときだと、安岡章太郎はいう。

当時は映画館など不良の巣であり、そこへ一人で中学生が出掛けるのはテンラクの第一歩だと、かんがえられていた。実際に安岡少年は中学の五年間、ほとんど毎年、二百人中百九十七、八番に低迷し、中学を卒業しても成績不良のため、なかなか高校に進学できない。松山高校、山形高校、高知高校という地方の高校を受験して三年連続不合格の憂き目をみた。

ところが、そんな落第生が作家になり、中学生のころのことを書いた『サーカスの馬』という小説が中学校の国語教科書に採用されたというから面白い。人間万事塞翁馬、と考えれば、つじつまがあっている。

そう思うのは安岡章太郎のおかげで、感情教育が大事だということに気づかされたからかもしれない。彼は『どん底』も『罪と罰』も『アンナ・カレーニナ』も、そして、『人生劇場』や『暢気眼鏡』も、みんな本で読んだり、舞台の芝居をみたりするよりさきに、映画でみている。

私の場合と逆だ。私は中学生のころは不良ではなく、映画館に入ったことがない。安岡のあげた作品はみんな映画よりさきに本で読んでいる。ところが、私が書いた文章はいちども中学校の国語



映画の感情教育

映画文学人生論

教科書に採用されることがない。他にも理由はあ
るだろうが、私の場合、感情教育が不足していた
とはいえる。

「映画の観方、受けとり方といったことになる
と、ほとんど無意識のうちに周囲の誰彼を世代で
色分けして考えているようだ」と安岡はいう。

彼はフェーデの『外人部隊』をシナ事変のはじ
まる少し前から戦争末期にかけて、かぞえきれぬ
ほど何度もみた。深夜、フル・スピードで飛ばし
てきたロードスターの運転席からシルク・ハット
の吹っ飛ぶ最初の場面やアスファルト道路にアフ
リカ人の子供がはだして駆け出し、カン高いピッ
コロとラツパとうだるような太鼓の音が聞こえて
くる場面は、網膜や鼓膜に貼り付いたように残っ
ている。また、彼の感情教育は、『望郷』『女だ
けの都』『巴里の屋根の下』『巴里祭』などフ
ランス映画からうけたものかもしれないという。

フランス文学よりもフランス映画の影響を強く
受けているのだ。それは戦争中、ペタン政府がナ
チに協力して日本の友好国になったおかげでフラ
ンス映画がアメリカ映画のように上映禁止になら
なかったという特別な事情も幸いしている。

戦後、フランス文学がブームになった時期があ
るが、その一時的なブームは戦時中に半ば抑圧さ
れた映画の感情教育のあらわれかもしれない。

女だけの都巴里祭巴里の屋根の下